

Journal of Chubu University Education

No. 21
2021

【実践研究・実践報告】

コロナ禍における英語遠隔授業2年目の挑戦

ー学習意欲向上と英語コミュニケーション基礎力の定着をめざした授業デザイン例ー

..... 小栗成子

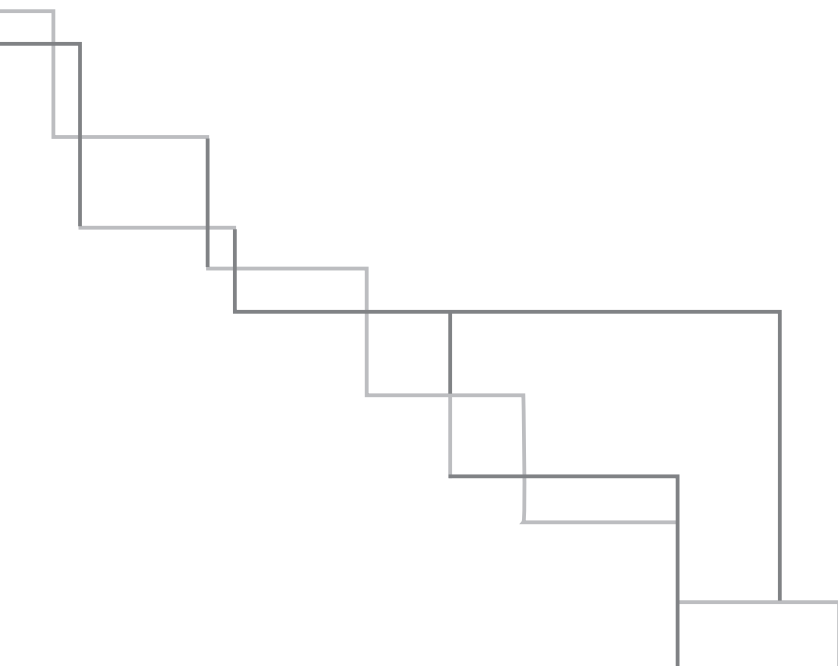
アレン デイビッド P.

【Practical Reports】

Challenges in the 2nd Year of Distance Learning During COVID-19:

A Class Design for Improving both Skills and Motivation in English Learners

..... Seiko Oguri and ALLEN David P.



コロナ禍における英語遠隔授業 2 年目の挑戦

ー学習意欲向上と英語コミュニケーション基礎力の定着をめざした授業デザイン例ー

小栗 成子^{*1}・アレン デイビッド P.^{*2}

要 旨

ロボット理工学科（ER学科）1～2 年次英語授業では、どのようにすれば週に 1 回の最小限の授業時間を学習のきっかけとできるかを探究し、学生の英語習得への意欲を向上させるためのブレンド型教育を実践してきた。2014年度の設置から2019年度までの間、対面授業とオンライン語学教育環境とをブレンドし、英語基礎力の定着を目指してきた。しかし2020年度春学期には新型コロナウイルス感染症の蔓延に妨げられ、急遽、遠隔授業のみで入学したばかりの 1 年生をいかに主体的な学習軌道に乗せ、英語コミュニケーション力の育成へと向かわせるかを検討しなければならなくなった。コロナ禍での遠隔授業にどのようにこれまでの経験を最適化しようとしたかについては、中部大学教育研究20（2020）にて報告した。本稿では、ER学科 2 年次の必須英語授業に焦点を当て、2020年度秋学期を経て2021年度春学期にどのように授業改善を試みたか、3 学期目となる2021年度春学期末までに学生の英語習得への意欲関心は変化してきたのかどうかについて報告する。

キーワード

遠隔授業、英語教授法、英語力定着、教材活用、教師の役割

1 はじめに

1.1 背景

2014年度に設置されたER学科には、2 年間の英語プログラムがある。その目標は次の通りである。

- ①心理的バリアの軽減：英語への抵抗感や嫌悪感の緩和と英語学習への再挑戦
- ②未開発能力の育成：リスニングの基礎力育成とコミュニケーション能力素地の育成
- ③学習基盤の形成：擬似初心者レベルからの脱出
- ④自己調整能力の育成：いかなる領域での学習にも通じる主体的な学習能力の形成
- ⑤異文化受容力・適応力の育成：異文化間コミュニケーションに必要とされる人間力の形成
- ⑥言語観の育成：科目としての語学を越え、自己実現力の一助となる自身の母語や英語を含む外国語に対して視野を拡大
- ⑦自律的学習者の育成：授業外、単位取得後において必要な語学力を習得しようとする意欲を育成

従来は①から⑤を 1 年次の目標とし、⑥⑦を 2 年次に加えていた。これまでは足場かけをしながら緩やかにスタートして徐々に目標を広げていくスタンスであっ

た。しかし、2020年度春学期、新型コロナウイルスによる感染症対策のため、このプログラムもオンデマンド型遠隔授業で実施することになった際、2 年間の目標を 1 年目の最初から 2 年目の終わりまで総合的に貫いてみることにし、軌道修正を図った。

1.2 2 年間プログラムの目的

ER学科の 2 年間の英語プログラムでは、従来は前述の 7 項目をもとに各年次の達成目標として次のことを掲げていた。

■ 1 年次達成目標

- a. 英語学習に対する不安感を低減し、自己肯定感を得られるようにする。
- b. 語学学習の意識を暗記から習得へ向けさせ、自主学习における達成感を実感できるようにする。
- c. 自分のことについて、英語でコミュニケーションしようとする姿勢を形成する。

■ 2 年次達成目標

- a. 英語で話す・書くための基礎をさらに強化する。
- b. 英語で読む・聞く受信力を強化する。

*1 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム 教授

*2 人間力創成総合教育センター 語学教育プログラム 講師

- c. 実社会のことへ関心を広げ、英語でコミュニケーションしようとする姿勢を形成する。

このような目標を達成すべく、本プログラムでは図1のようなコンセプトで対面授業とオンライン教材を結び合わせたブレンド型授業を実践してきた。

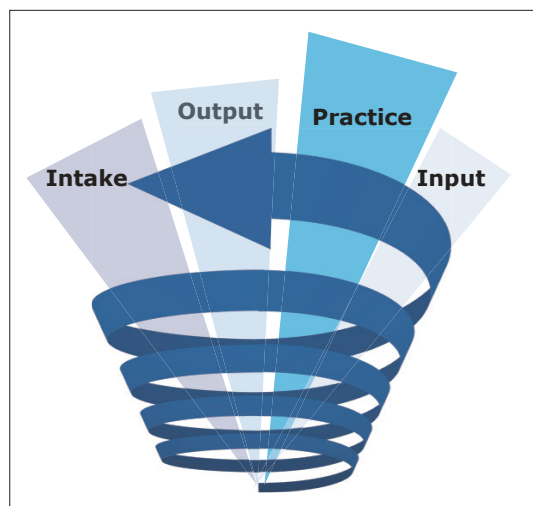


図1 スパイラル型ブレンド教育のコンセプト
(Oguri et al. 2018)

図1は、インテイク（定着）はインプット→練習→アウトプットをスパイラル型（循環的）に行うことで叶うというコンセプトを表すものである。インプットから定着までの段階は直線的に達成できるものではなく、インプットしたことは行ったり来たりを何度も繰り返しながら、ようやく少しずつインテイクされていくというコンセプトである。2020年度春学期、遠隔形式での授業実施となったことは、これまでのブレンド型授業をいわば逆転させる試みの始まりとなった。最大の挑戦は、前述の授業目標をいかに遠隔授業形式で実現するかということであった。

2020年度春学期、一度も対面したことがない1年生を対象とした授業において、どのような形式が最適であるのかは、実施をし始めてみなければ明らかではなかった。2014年度からの本授業のブレンド型授業の実践とそこでの問題解決などを基に、そして1990年代後半から筆者が実践を重ねてきたインターネットを活用した英語授業の実践や研究を振り返りながら、遠隔授業での語学教育実践を構想した。¹⁾

2 1年目と2年目の授業実践比較

2.1 授業達成目標とブレンド方法の修正

2020年度春学期の本プログラムでは、図1のスパイラル型ブレンド教育のコンセプトを維持しながら、1年ずつではなく2年間で達成目標に近づけるような方

法を検討した。

新入生にとっては、体験したことがない形式での授業受講である。不慣れなパソコン操作、初めて操作するアプリケーションであることや自宅のインターネット環境の違いもある。授業を受講し学習を開始するのに、このような大小様々な障壁があることや不安、抵抗感に配慮した上で実践できる授業方法を模索した。

本授業が従来、活用していたICTは次のとおりである。

- a) CALL教室またはLL教室といった語学専門環境
- b) 教材コンテンツ作成とLMSを備えたwebプラットフォーム「Glexa」(チエル/Version 2)
- c) 英語e-Learningシステム「ATR CALL BRIX」(内田洋行/ATR)

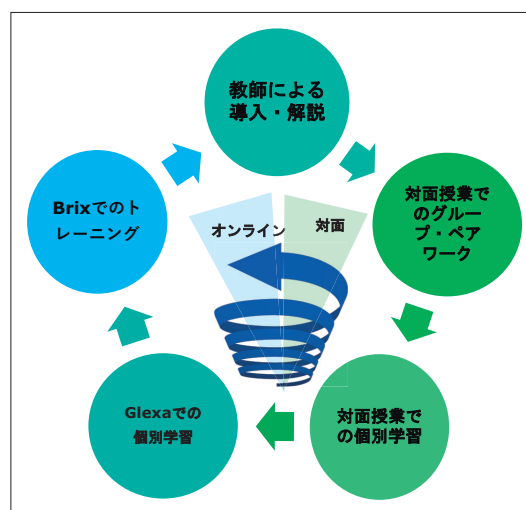


図2 従来の本授業におけるブレンドの循環

図2は、従来の本授業における対面授業とオンライン指導・学習のブレンド型実践を示している。対面授業での教師による導入・解説に始まり、対面授業では90分のほとんどをグループまたはペアワークを通して、学習ターゲットの習得に結びつくアクティビティを展開する。対面授業では個別学習の時間がある場合もあり、1年次はCALL教室を使用し、Glexaでの学習やBrixでのトレーニング方法の指導と実習を含めるなどオンラインでの学習導入教育も行っていた。

2020年度春学期と秋学期は、(a) オンデマンド型資料配信、(b) オンデマンド型個別学習、(c) リアルタイム講義・指導を融合させた方法で授業を実践した。使用したツールは、従来通りの「Glexa」「Brix」に加え、ZoomとMyELT (Cengage出版社によるe-learning教材)を用いた。本授業では1年次に3人、2年次に2人の教師が携わり協同授業を行っているが、教師間のコミュニケーションや情報共有には、Slack、

Googleドライブ、Dropboxを活用した。

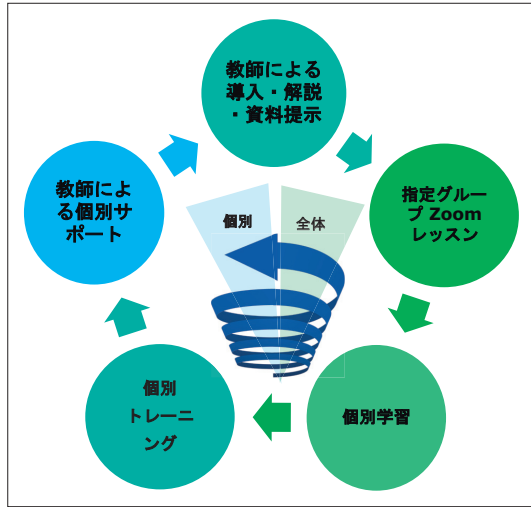


図3 遠隔授業におけるブレンドの循環

図3は、遠隔授業となった2020年度春学期からの授業におけるブレンド型教育の循環を示している。講義資料の提示（導入・解説）に始まり、Zoomで指定グループにレッスンを実施、個別学習やトレーニングへ、「Glexa」「Brix」のLMSを通じて学習・トレーニング状況を把握しながら、また「Glexa」のチャットルームも用いて、質問対応や個別のサポートを実施、全員に共有する必要があると判断された個別指導内容は、次の講義資料へと結びついていくという循環である。この循環は週一回の授業での大きな流れであるが、場合によってはこの循環が一回の授業の中で何度も発生することもある。

2.2 授業構成の比較



図4 2020年度英語遠隔授業構成

図4は、2020年度春学期、秋学期の授業構成を示している。①「ATR CALL BRIX」（Brix）で音声に重点を置いた基礎・応用力強化を行い、②GlexaにPronunciation Lessons（発音基礎レッスン）を用意し、③Zoomで個別英語面接を行って英語コミュニケー

ション実践（個人面接）をさせ、④テキスト出版社（Cengage）作成のオンラインワークブック「My ELT」で予復習をさせ、さらに⑤Glexaでテキストの主要部分の学習を深化させるという構成である。2020年度は、1年次も2年次の授業と同様に図4のように構成した。



図5 2021年度英語遠隔授業構成

図5は、2021年度の遠隔授業構成を示している。2020年度と2021年度の大きな違いは、Zoomでのレッスン構成にある。活用したツールは同じであるが、Zoomで行う指導内容を2020年度の経験を踏まえて、2021年度には修正をしてみた。

2020年度は、教師も学生も遠隔授業受講が初めてであった。入学したばかりの学生は、オンライン教材を使用した学習も初めてであり、また、各家庭でのネット環境、特に実家から離れて一人暮らしを始めた学生の学習環境にも配慮しながらスタートする必要がある。授業の内容について詳しくは後述するが、2021年度には数名のグループに対するZoomレッスンという形式に修正し、1年目よりもう少し学習コミュニティ要素を加えられるよう授業構成を修正した。

図6は、2020年度に構築した遠隔授業の構成を示している。「Glexa」を授業のホームルーム的なWebプラットフォームとし、教材作成から公開、提出までをLMSで管理する傍ら、「レクチャーノート」と称した講義資料を公開し、授業内容の解説、手順説明や学習のヒントを示した。学生は、学習・トレーニングを「Glexa」と「Brix」で行い、2020年度は学期中2回（各10分）、指定された日時にZoomでの英語個人面接を受けた。授業の双方向性を実現するためには、メールのほかGlexaのチャット機能を使って学生とのやり取りをし、また、学生に学習後に「Self-Reflection Form」と称された学習のふりかえりをGlexaに記録させた。「Self-Reflection Form」は、その日の学習を次へ活かすための、自立した学習者の育成を目指した手立てであるが、教師もこれによりその日の学習がどのようであったかを把握できるだけでなく、コメントも返すことができ、学習を孤独化させない策の1つ

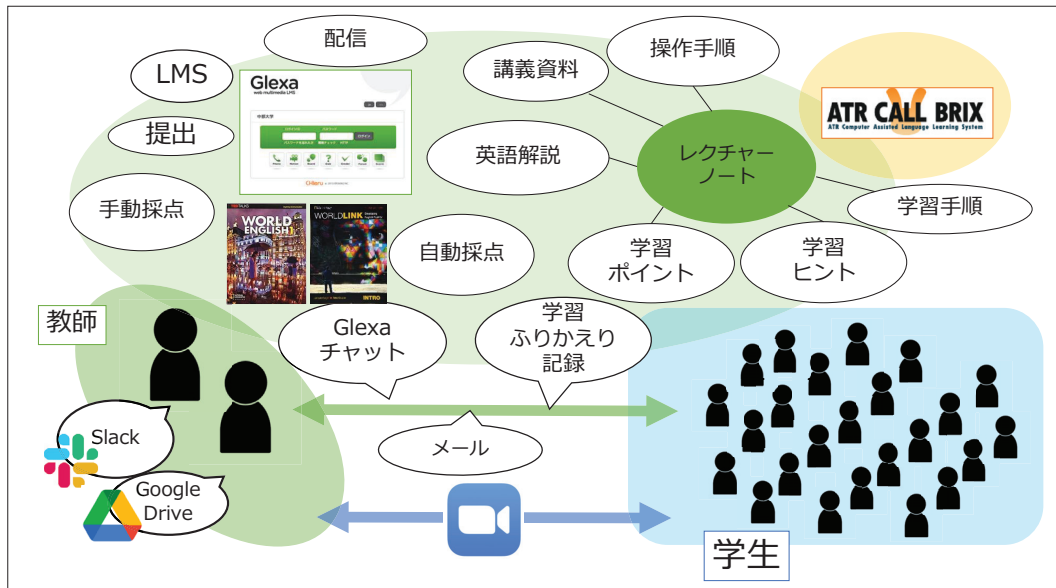


図6 2020年度からの英語遠隔授業構成

としても役立てた。

春学期、秋学期とも、1年生授業（2020年度春学期91名）、2年生授業（2020年度春学期81名）の手法を同じようにした。2021年度春学期も、1・2年生ともにこの授業構成自体は維持している。

2.3 2年目の修正点

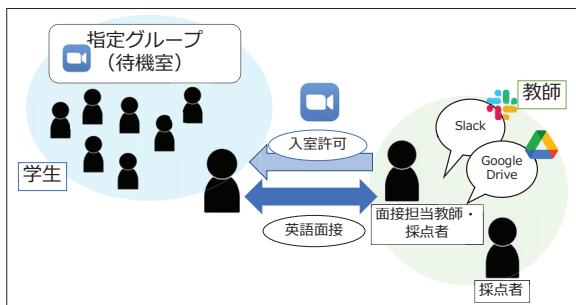


図7 2020年度の英語面接方法

図7は2020年度に活用した英語面接方法の様子を表している。2020年度は、春学期・秋学期ともに、学生一人ずつとの時間共有を主として個人との面接とした。1コマの授業で8人までを時間指定し、入れ替わりを含めて学生一人に対して10分ずつの時間割を作成し、毎授業で英語面接を実施した。

1年次・2年次の両授業は小栗、アレンの二人が担当をしているが、二人が1クラスずつ分担するのではなく、全クラスを二人で協同して指導している。この方法はこのプログラムの開始時から継続している方法である。授業での英語面接においては、アレン講師が面接をし、小栗はカメラをオフにして観察と採点を行った。

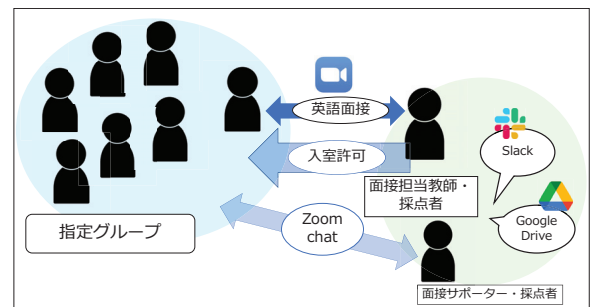


図8 2021年度の英語面接方法

図8は、2021年度の英語面接方法の様子を表している。2020年度に個人面接であったものを、2021年度はグループ型に変更をした。日時を指定されたグループは、グループごとにZoomに招かれ、そのうち一人ずつと教師が英語面接を行う方式にした。この面接方法では、アレンが面接に徹し、小栗はカメラをオフにして観察・評価をしながら、Zoomチャット機能を用いて、ヒントや学習ポイントを発信し、グループ面接が学習の場として活性化するようにファシリテートしている。

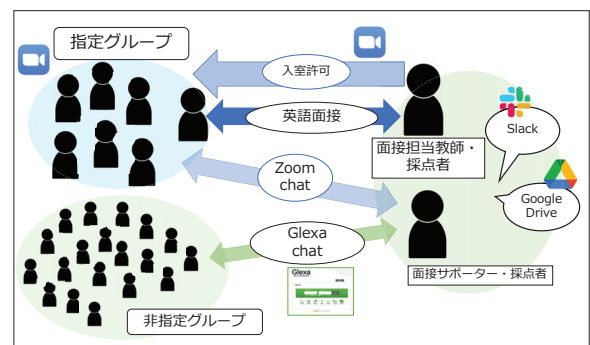


図9 2021年度遠隔授業におけるクラスの全体像

図 9 は、1 コマの授業での 2 クラスの遠隔授業全体像を表している。同時開講の 2 クラスに対して、担当者 2 名で 2 クラスを教える協同授業のイメージである。指定されたグループ以外は、個別学習をオンデマンド型で進めていく。時間の都合上 1 クラスの Zoom レッスンを設けているので、各クラスは隔週で英語面接ありの週、英語面接なしの週を過ごしている。受講は止むを得ない事情がある場合を除いて、授業時間にするように指示している。

3 授業構成の修正の目的と効果

3.1 英語面接方法の修正

2020 年度春学期からの遠隔授業における英語面接では、アレンは面接に集中し、小栗が英語面接の観察に並行し、面接に指定されていない学生の学習状況を LMS で確認して学生にフィードバックしたり、メール、チャット対応をしたりした。英語面接では英語評価、学習成果の確認にとどまらず、遠隔授業の状況やコロナ禍に対する学生の順応の様子にも気を配り観察したり、話をしたりできる雰囲気作りにも努めた。学期中 2 回、前半と後半に英語面接をすることにより、英語力や学習力の向上を確認できただけでなく、さらにどのような資料を補充したり指導すべきかを明らかにしたりすることができた。

1 学期間に 10 分間×2 回だけでも英語を一人で話そうとする取り組みは、コロナ禍で突然孤独を味わうことにもなった学生たちと教師がつながる貴重な機会でもあった。ネット環境などの不具合があった場合にも、1 対 1 であれば他の学生へ影響を及ぼすことなく実施できたほか、スケジュールを再調整しやすいなどの利点もあった。

しかしながら、課題となったのは次のような点であった。

- ① 1 年生 91 名そして 2 年生 81 名に同じような解説を繰り返さなくてはならない場面が多く生じた。
- ② 英語個人面接があるグループは緊張し、それ以外のグループは、やや緊張感にかけてしまう学習の様子が伺えた。
- ③ 次の面接までの期間が長く空くため、短期間の目標を学生が見失いがちであった。
- ④ 英語面接のトピックが同様であることから、順番が先にくる学生から後の学生にトピックが流布され、後の学生の方が事前準備を進めやすいという格差が生じた。

これらを踏まえ、遠隔授業 2 年目となった 2021 年度春学期の遠隔授業では、次のように改善を試みた。

- ① 英語面接を個別ではなくグループに変更した。
- ② グループ面接とすることで、ピア（クラスメイト）と教師との対話を聞く姿勢を培えるようにした。
- ③ 対話を聞く間に、Zoom チャットで語彙表現ヒントや異文化間コミュニケーションの注意点をファシリテーターがチャットし聞きながら学べるようにした。
- ④ グループ面接の Zoom チャットから得られた資料を、必要に応じてクラス全体の指導へ反映し、生きた教材・資料を作成した。

グループ面接の方法は、2021 年度春学期 1 年生授業にも、遠隔授業 2 年目を迎えた 2 年生授業にも導入した。グループ面接は、1 コマの授業に 3 グループとした。

表 1 2021 年度春学期 2 年生授業構成

授業日	クラス	人数
月曜日 5-6 限	A	21
	B	25
火曜日 5-6 限	C	21
	D	18

表 1 は 2021 年度春学期の人数構成を示している。グループレッスンの構成は、1 コマに 3 グループ構成とした。1 グループ 25 分ずつとし、グループとグループの間に 5 分間を空けてスケジュールを組んだ。これにより教師と学生ひとりずつの対話時間は 3 分程度と短い、多くのことを話したりするには抵抗感がまだあるため、「話さなければならない」という負担をあまり感じさせないように配慮した。

グループを減らしたほうが、教師の説明が重複しなくて良いのではないかと、ということも検討したが、そうすれば 1 グループの時間が長くなる。1 グループの時間が長くなればなるほど、自分が話した後の「聞く」時間に集中力を無くしてしまうであろうことは容易に推測できる。そのため、最低限での個別時間であり、最大限のグループ時間とすべきであろうと 25 分構成を考えた。

本プログラムでは Zoom のブレイクアウトルームを使用していない。その理由としては、次のようなことがあげられる。

- ① 「教師の目がない」ことにより、英語力によっては L1（母語）使用が L2（ターゲット言語）の使用を上回ることが推測される。
- ② 英語力が少し高い学生または話す意欲がある学生がその場を占領し、他の学生が話す機会がなくなる可能性がある。

- ③英語運用力を確実に測れている段階ではないので英語力のバランスを考えてグループを毎週構成することは困難である。
- ④各ブレイクアウトルームを一度に観察することはできず、各ルームを指導して回ったりする時間が短くなる可能性がある。
- ⑤ブレイクアウトルームは録画できず、各学生がどのようにL2を使おうとしたかが評価しづらい。

クラスやグループの特性、アクティビティ内容によっては、Zoomのブレイクアウトルームの活用は有益だと考える。しかし、本プログラムの習得目標やアクティビティ内容では、教師対学生一人の対話をグループで行なっていく方法が最適であると考えた。

3.2 2つの面接方法の比較

2020年度の個別面接と、2021年度のグループ面接とを比較すると、次のような変化があげられる。

a. 面接時間

- ①個別面接ではひとり10分、1学期間に2回の実施となるため対話時間は最大でも20分である。
- ②グループ面接では、1学期間に5回程度の実施となる。対話時間はひとり3-5分程度であるため、1学期間に15-25分となる。

b. 間隔

- ①個別面接では、1回目と2回目の面接までに7週間程度の空白が空く。
- ②グループ面接では、隔週での実施となる。

c. 共有・連帯感

- ①個別面接では、教師との個別の時間は確保されるが、対話内容を共有したり他者から学んだりすることはできない。
- ②グループ面接は、聞き手としての育成機会ともなり、時間と対話を共有し、話題によっては教師が複数の学生の発話内容を結びつけることができ、学習者コミュニティを形成できる。

d. 学習促進

- ①個別面接では面接官がZoomチャットで学生にヒントを与えたり、未知語のつづりを教えたりしていた。そのため面接が中断したり、沈黙の時間が発生したりしていた。
- ②グループ面接では、面接官は面接に専念することができ、ファシリテーター役の教師が言語面・文化面のヒントをZoomチャットでグループ全員に伝えることができる。学生は重要語彙表現をその場で学んだり、ノートしたり、チャットごとダウンロードして保管することができる。面接官と学生の間で誤解が生じた時には、チャットでファシ

リテーターがヒントを出し誤解を解消することもできる。

3.3 英語面接方法に関する学生の反応

2021年度春学期最終週の後、「英語に関する意識調査」を行なった。回答者は遠隔授業2年目の受講者85名、調査方法にはGoogle Formを用い、84名が回答した（回答率99%）。この調査の一部で、Zoomでの英語面接方法に関する質問をしたところ、次のような結果が得られた。

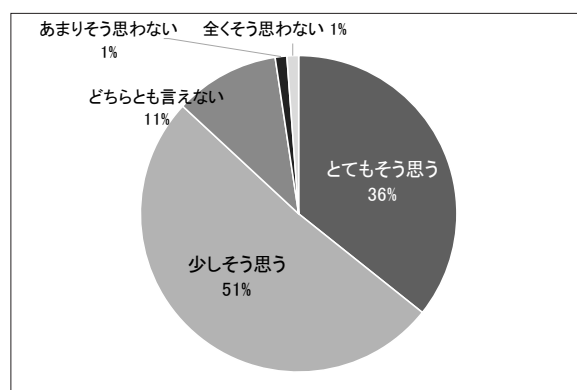


図10 「グループレッスンの方が他者から学べたと感じる」(n=84)

図10は「1年次の個人面接よりグループレッスンの方が、他のメンバーと先生の対話から学ぶことができた」と思うかどうかという問いへの回答である。84人中87%が肯定的に回答した。

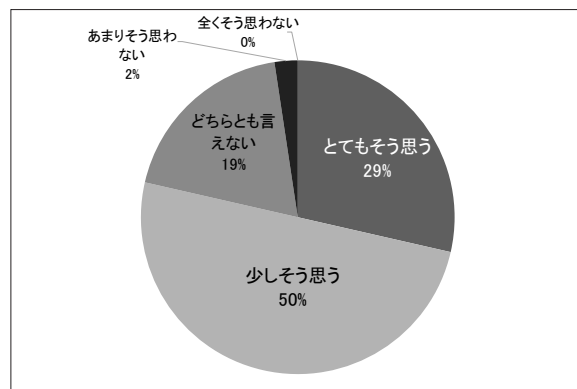


図11 「グループレッスンの方がより対話機会が多いと感じる」(n=84)

図11は、「個人面接より、グループレッスンの方が英語を話す実践機会が多くて良い」と思ったかどうかという問いへの回答である。84人中79%が肯定的に回答した。

図12は、「対話時間は同じだとして、1年次の授業ではグループレッスン／個人面接のどちらが良いと思

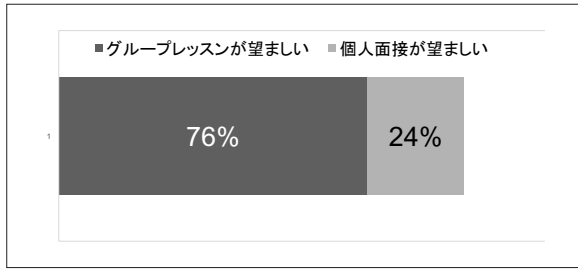


図12 1年次授業での英語面接方法 (n=84)

うか」に対する回答である。筆者は「1年次はまだクラスメイトとお知り合っておらず、グループ面接より個人面接の方が人の目を気にせず遠慮なく対話できるのではないか」と推測していたが、84人中76%がグループレッスンの方がよいと回答した。

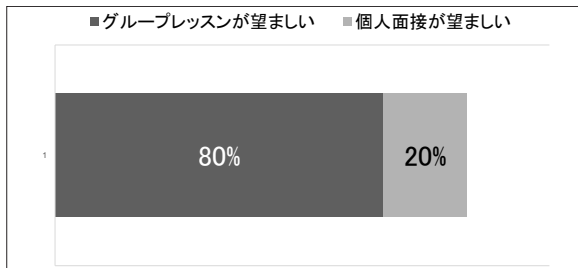


図13 2年次授業での英語面接方法 (n=84)

図13は「対話時間は同じだとして、2年次の授業ではグループレッスン、個人面接のどちらが良いと思うか」に対する回答である。84人中80%がグループレッスンを選択した。

4 意識調査のまとめ

次に、同調査から学生が授業内容をどう捉えたか、英語力の変化についてどのように感じているか、今後どうして行きたいかなどに関する問いに対する回答を報告する。

4.1 英語習得に対する意欲の変化

図14は、本プログラムの英語授業 3 学期目を終え、

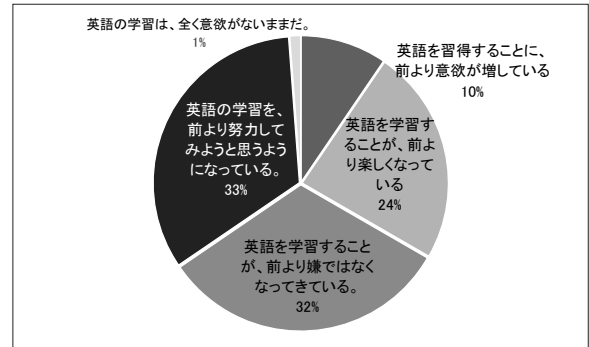


図14 英語学習に対する意欲の変化 (n=84)

英語学習に対してどのように感じているかの質問に対する回答を示している。1年次の開始前と現在を比べると、「意欲が増している」「楽しくなっている」という回答は28人 (33%)、「嫌ではなくなってきた」「努力してみようと思うようになっている」という回答が55人 (65%)、であった。「意欲がないまま」であると答えたのは、1人であった。

4.2 英語力の変化

図15、図16は、発音トレーニングに関する問いへの回答結果である。「変化している」と回答したのは68人であったのに対し、「変化していない」「分からない」と回答したのは16人 (19%) であった。本プログラムでは2年間にわたって、単語の発音やアクセントのみならず、文のプロソディ (韻律)²⁾ のトレーニングにも重点を置いている。図16は現在のプロソディ力につ

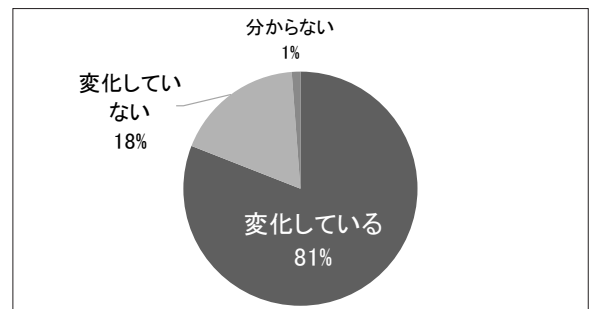


図15 発音トレーニングによる変化 (n=84)

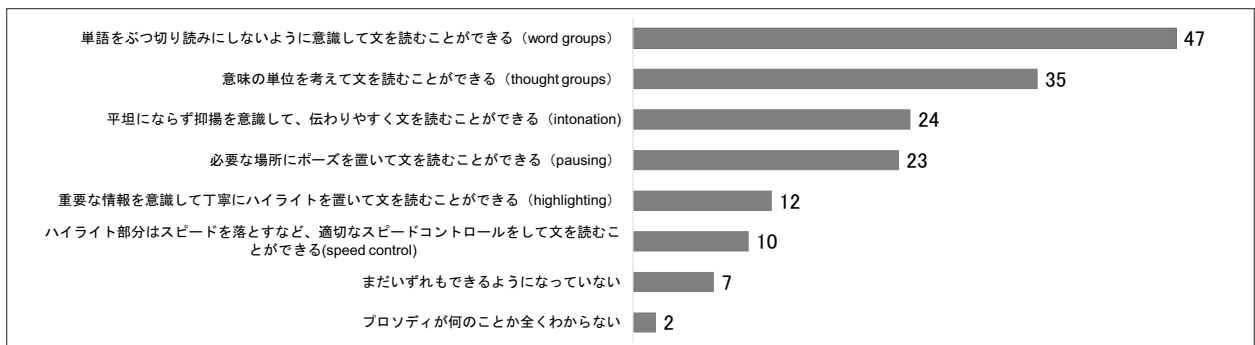


図16 発音向上が感じられること (複数回答)

いて自信がついてきているものを複数選択してもらった回答である。単語のまとまり (word group) を意識して「ぶつ切りにしないように読もうとすることができる」を選択した学生が最も多く、47回答であった。続いて多かったのは「意味の単位 (thought group) を考えて読む」ことで「抑揚」「区切り方」に気をつけているという選択肢の順になっている。単語のまとまりを分断させないことや、意味のまとまりを分断させないことは、比較的習得をしやすいし自覚もしやすいが、表現力とも言える抑揚や間を空けること (pause)、重要な部分をハイライトしたり、話す速さをコントロールしたりすることを習得するには、訓練と時間を要する。本調査の結果は、その難易度を反映した結果となっている。

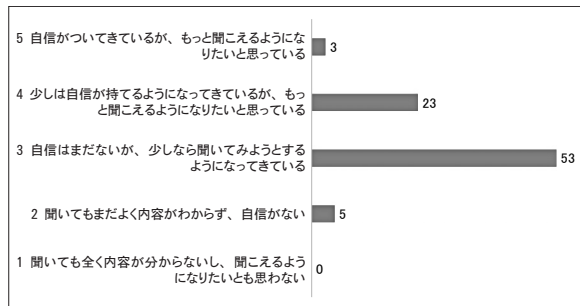


図17 リスニング力に関する意識 (n=84)

本プログラムでは発音することや文を読み上げることに加えて、英語のリスニングトレーニングにも重点を置いている。図17は3学期間の学習を経て、自分のリスニング力をどのように感じているかを、5つの選択肢から選んでもらった回答である。自信が持てているのは26人であるが、「聞いてみよう」とする姿勢になっているとの回答は53人であった。「よく内容が分からない」を選んだのは5人であったが、「全く内容が分からない」を選んだ学生はいなかった。

英語のリスニング力について、どのような変化を感じるかを質問したところ、次のような回答があった。

「落ち着いて聞き取れるようになってきた。」

「単語ではなく、文で意味をとらえようという意識を持つようになった。」

「リスニングは苦手だったが以前より聞きやすく意味も理解できることが増えた。」

「単語単位で意味を考えるクセがかなり解消された。」

「音が繋がると、全く聞きとれなかったが、今は分かるようになった。」

「以前は聞いた文を日本語訳していたが、今は少し英語のままで意味を理解できるようになった。」

「意味が瞬時に分かる時が増えている。」

「以前は早く感じ、聞き取れなかったが、徐々に聞き取りやすくなってきた。」

「苦手だったディクテーションが前よりもよりできるようになった。」

「発音のしかたを学ぶことで聞き取れることが1年の時より増えてきた。」

「1年生の春学期最初は長い英文だけを聞かされても全くと言って良いほど理解できなかったが、今は所々どんなテーマの話をしているかがわかるようになった。」

「英語を聴く機会が今までより圧倒的に増えたため、リスニング力が向上し、1年生の頃より、かなり良くなっていると思う。」

「英語で動画を見るときに、なんとなくではあるが英語のまま脳に入ようになってきており、英語の映画や動画を見やすくなってきた。」

「シャドーイングを積み重ねていくことで頭に残る英語量が増えて、聞こえる英語も増えてきた。」

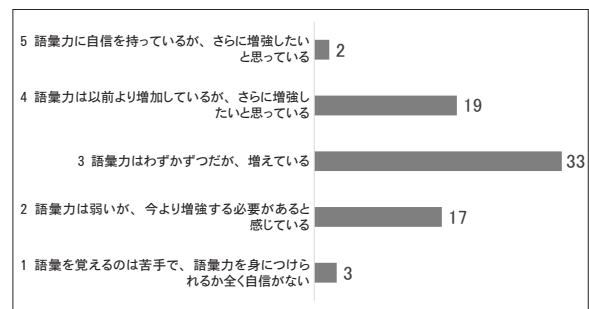


図18 語彙力の変化 (n=84)

本プログラムでは、語彙学習だけを際立たせたり、語彙テストをしたりはほとんどしていない。しかし文の中での語彙の役割や、品詞の学習、場面に応じた語彙選択などについての学習はしている。図18は語彙力の変化に関する質問に対しての回答である。語彙力について「自信がある」「増えている」と感じていると回答したのは、54人であったのに対して、「増強する必要がある」と感じているのは17人、「語彙を身につける自信がない」と答えたのは3人であった。

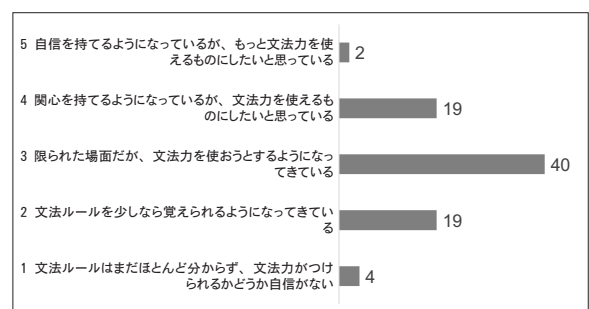


図19 文法応用力の変化 (n=84)

本プログラムでは、文法問題に解答していくことではなく、文法ルールを学び、英語を読む・聞く場合にその文法ルールがどのように適用されているか、英語を書く・話す場合に文法ルールをどのように使うかというトレーニングに重点を置いている。図19は文法を使おうとする力に関する質問に対する回答である。

61人が文法を「使おう」とする自信や意欲を示しており、19人が「少しなら覚えられるようになってきている」と回答した。文法力の習得についても「自信がない」と回答したのは4人であった。

本プログラムでは、英語の文法訳読は行ってはいない。1年次はリスニングを最優先して逐語訳をせずに内容を聞き取る訓練を、2年次にはリーディングの量を徐々に増していきながら、スキミング、スキミングを含むリーディングストラテジーを身につけ、リーディングをとおして、語彙や文法の使われ方、情報提示のしかたを学ぼうとしている。

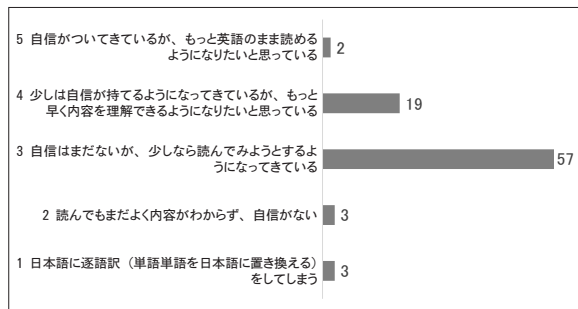


図20 リーディング力の変化 (n=84)

図20はリーディング力の変化に関する回答を示している。「英語を読むことに自信がない」または「単語逐語訳をしてしまう」と回答したのは6人であったのに対し、「英語を読んでみよう」「もっと上達させたい」と答えたのは78人であった。

4.3 変化の認識と今後への期待

同調査において、「3学期目の終わりに感じていることは何か」に関する質問には、次のような選択肢を用意した。

- a) 理解できる単語を増やし、使おうとする力
- b) 辞書を使って語彙を調べる習慣
- c) 正しくつづける単語を増やし、使おうとする力
- d) 読む力と書く力を結びつけようとする力
- e) 読んで内容・情報を正しく理解しようとする力
- f) 正しいアクセントをつけて読み上げたり話したりする力
- g) 正しい発音で読み上げたり話したりする力
- h) 適切なプロソディで読み上げたり話したりする力

- i) 聞く力と話す力を結びつけようとする力
- j) ビデオジャーナル（動画課題）を英語字幕なしで理解しようとする力
- k) 聞いて内容・情報を正しく理解しようとする力
- l) 語順や文法など、英語の基本ルールを使おうとする力
- m) 読む・聞く・書く・話すために必要な文法力を使う力
- n) 相手に伝わりやすく英語でコミュニケーションする力をつけようとする力

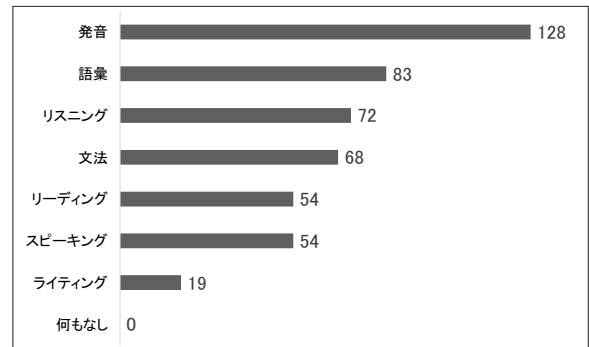


図21 3学期目に感じている変化（複数回答）

図21は上記 a)～n) から選択された回答を分類して選択数をまとめたものである。最も選択が多かった項目は、発音で128回答であった。3学期間の重点的なトレーニングをとおして、「発音」に関する肯定感が高まったことを示している。「語彙」「リスニング」「文法」関連の項目が選択の上位となっていた。「変化を感じていることは何もない」と回答したのは0人であった。

前述の a)～n) の項目を用いて、「これからさらに向上させたい力は何か」を質問した。図22は同じく選択回答数を分類ごとにまとめたものである。「発音」が116回答、「語彙」98回答、「文法」94回答、「スピーキング」73回答となっていた。

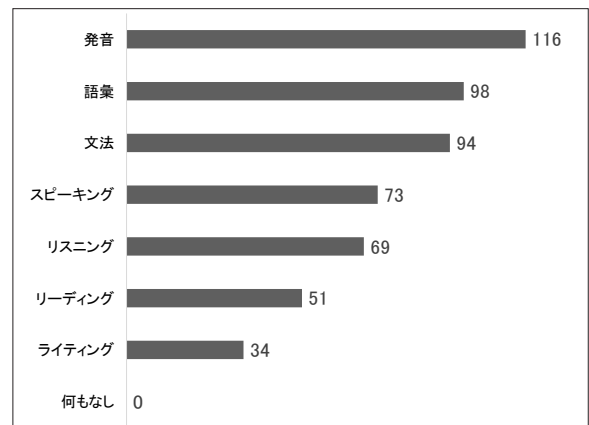


図22 これからさらに向上させたいこと（複数選択）

図21が示すように、「変化した」と選択した事柄の順位は、①発音 ②語彙 ③リスニング ④文法 ⑤リーディングの順であった。「これからさらに向上させたいこと」では、図22が示すように①発音 ②語彙 ③文法 ④スピーキング ⑤リスニングとなっている。この結果からは、1年次の1学期目から3学期までの間に、発音は最も変化を感じているものであるが、さらに向上をさせたいものであることが分かる。語彙に関しても増強したいと感じているが、スピーキング力、リスニング力を伸ばすためにも今よりも文法力を向上させたいと感じていることが分かる。

5 2-3 学期目のふりかえり

5.1 2 学期目から見た課題

手探りで始まった2020年度春学期の遠隔授業を経て、2020年度秋学期には、1つの変化が授業に大きく影響をもたらした。それは、科目によっては対面授業となったことにより、学生がキャンパスで遠隔授業を受けるようになったことであった。2020年度春学期には、新入学した学生との英語面接をZoomでマスクなしですることができ、直には会えていなくとも、画面越しに顔を見ることができていた。しかし、秋学期には1/3から半分ほどの学生がキャンパスで受講するようになった。これによる影響は、次のようなことであった。

- 1) 単一の流れから、柔軟性を増した構成で各授業時間をデザインしなくてはならなくなった。特に学習上効果的な流れで授業メニューを受講できる学生と、キャンパスでの制約により、メニュー順などに制限をうけながら受講する学生がおり、その間に習得上の格差が生じないよう授業メニューと流れを何通りも考慮しなければならなくなった。
- 2) 1コマ目の授業を受講する学生で、2コマ目の授業が対面授業の場合など、通学時間の調整の相談に応じなくてはならなくなった。
- 3) キャンパスで遠隔授業を受講する学生がZoomでの英語面接をする場合、どこでなら発話ができるかを確認しなければならなくなった。
- 4) 感染対策上安全な通学や帰宅時刻に合わせて、Zoomでの英語面接の順番も、配慮・調整しなければならなくなった。
- 5) 回線都合やマスク越しの発話は聞きとりやすくないため、マスクを着用して面接を受けなければならない学生に、教師も適応しなければならなくなった。

英語面接に限らず、発音に重点をおいた授業を実施しようとする時、マスクを着用した学生への発音指導は新たな課題となった。対面授業と遠隔授業の組み合

わせによっては、1コマ目から5コマ目まで身長に合わない机・椅子に座っていなければならないケースもあり、身体的に辛いという相談も受けた。1年次木曜日の授業は5コマ目であることから、5コマ目の終了時以降に帰宅ラッシュに巻き込まれることに不安を感じる学生もいたり、授業のフルメニューを推奨順に落ち着いて受講したいという相談も受けたりした。そのような場合には、授業時間受講ルールをゆるめ、帰宅をし「遅れて」落ち着いてから遠隔受講するよう促した。そうした学生の学習終了時まで見守る必要があった場合には、教師側の授業時間の「延長戦」もやむをえなかった。

「授業はこうあるべき」という既成概念から離れ、「何ができなくなったか」と嘆きに終わるのではなく、遠隔授業のメリットに目を向けながら1年目の遠隔授業構築は終わった。しかし、コロナ禍はまだまだ終わりとはならなかった。対面授業ができるかもしれない、という期待を持って準備をした2021年度の春学期は、2年目の授業で初めて直に2020年度入学生と会えることに期待が高まり胸が躍った。

感染予防対策は引き続き必要であったため、本プログラムで講じた策は「ハイブリッドローテーション」である。対面授業を遠隔から受講するハイフレックス方式ではない。クラスを半分に分け、対面受講グループはキャンパスで授業を、遠隔受講グループはオンデマンドでオンライン学習・トレーニングをし、週ごとにグループが交代をするスケジュールを立てた。対面授業で直に会えた安堵と喜びを、教師と学生が共感した。

しかしながら、何よりも発音することに重点を置き、コミュニケーション力の向上を目指す語学アクティビティを「マスクをして」「人と人との距離を空けて」「インタラクティブに」行うことは難題で、コロナ禍以前の授業のようなアクティビティをペアやグループで行うことは、感染リスクへの不安と隣り合わせであった。学生にそのようなリスクを負わせてまで、従来よりも「静かに」あるいは「黙々と」受講するような対面授業を挟みこむ価値があるのか疑問でもあった。語学授業内で感染予防を徹底する方法、そして制約が多い中であれどのようにすれば英語力を伸ばす授業の実現につながるのかをあらためて考えさせられた。その結果、コロナ禍2年目の春学期も、途中から遠隔授業を実施するに至った。

5.2 3 学期目から見た課題

「遠隔授業の準備は大変である」というのは、教師の間で合言葉のようにもなっている。授業準備から授業終了後の整理まで、例えば通常の対面授業では短時

間で済む出席管理も、遠隔授業では「見えない」全学生の受講状況やアクティビティログ³⁾を確認して出席確認をする時間が必要になる。教師がそう思い込んでいる場合もあるが、学生の学習進捗状況も積極的な受講態度なども、対面授業では一度に見えやすい。それに対して遠隔授業では、多様な情報を集めて判断してみることにならざるをえない。「授業準備が大変なのに、力はつかない」ということであれば、その授業は空振りともいえ、教師にとってもそれは空虚なことである。

しかし、教師が最も考えなくてはならないのは、対面か遠隔かではなく授業そのもののほうである。授業の内容とそれによる効果に焦点を当てることを忘れてはならない。例えば本プログラムでは英語を発音すること、聞くことに重点を置いてきている。対面授業ではその場その場で発音をして見せたり、学生の発音を聞いて指導したりすることができる。音声止めたり流したり、再生回数を教師がコントロールしたり、音声再生の途中で説明を加えたり注意を促したりしながら、どのように聞く力を形成していけるかをリスニング課題をとおして体験させることも、対面授業では行いやすい。

それが遠隔授業になった時、そのままの方法をオンラインに移行すれば良いというものではない。遠隔授業にオンデマンド受講部分があるのであれば、それは学生が最も自分のペースでどんどん先へ進んでいけるチャンスだといえる。英語学習が苦手な学生も、他の学生に気兼ねすることなく、人目を気にしたり、人のペースに合わせず学習を進めたりしていくことができる。問題は、その学習軌道にどのように乗せ、その後どのように学習を適切に観察し、タイムリーに助言・指導できるかという点である。

授業の重点を発音に置いていたとしても、遠隔授業の場合は、特別に場を設けない限り学生が発音する姿は見えず声も聞こえない。「こう発音します」と説明したところで、その練習を再現できるかどうか、その練習が適切な方向へ向かっているかを確認することがなければ、発音指導を的確にしているとは言えない。本プログラムにおいて 1 年目に英語個別面接、2 年目に英語グループ面接を授業に組み込んだのは、その問題を解決するためである。

「Glexa」での学習も「Brix」でのトレーニングも教師は LMS により学生の学習進捗度を見ることが容易だ。しかし、授業としては「進んだかどうか」を確認するだけで良いとは言えない。課題が順調に進行しているように数値的には出ている場合でも、それがそのまま「英語力が向上している」ということにはならない。学習方法と質が問題だからである。これは対面

授業の中でも表面的に「真面目に受講している」ことが「英語力が向上している」ことを意味するわけではないのと、実は同じであろう。

遠隔授業のスタート点である Lecture Notes と名付けた講義資料の配信は、対面授業の冒頭で教師がレクチャーをするのと同様である。⁴⁾ Lecture Notes は従来の授業で口頭説明をしてきたことを、学生が一人で読んでも一層理解できるようにと用意している。対面授業での口頭説明は一過性になりがちであり、何度も同じ説明を教師が繰り返さなくてはならない場面もよくある。Lecture Notes の存在は、今後、対面授業になっても何をどの程度資料で説明できるのか、どのような説明は口頭の方が良いかを考えるきっかけとなった。

遠隔授業をインタラクティブにするための手立てとしては、英語面接や授業時間内のチャットルーム活用のほか、Self-Reflection Form (学習のふりかえり記録)⁵⁾がある。授業を一方方向にしない手立ては、対面授業でも遠隔授業でも、同じように必要なものであると考えることができる。

英語面接は、個別であれグループであれ、授業メニューにあることをどれほど学習し、練習し、定着することができるかを学生も教師も確認できる場である。グループ面接の場合は、自分が指名されている時間以外の部分でどのように集中しているか、学んでいるかも観察することができる。学生の表情や様子から、英語力以外の部分で抱える問題にも気づききっかけとなることもある。その様子に合わせて Self-Reflection Form に目を向けたり、学習進捗状況を確認したりすることにもつながっていく。

Zoom などを利用した英語面接の最大の利点は録画が容易にでき、文字チャット部分の記録も保存しておくことができることにある。従来の対面授業では、一般の教室で授業録画することは容易ではなく、教師の発言も敢えて録画・録音をしない限り一過性のものとなりがちである。

6 考察と今後の課題

発音のトレーニングがどのようにリスニング力の向上へ、リスニング力の向上がどのようにリーディング力の向上に結びついていくか、発音トレーニングとリスニング力の向上、文法力・語彙力の強化が、どのようにスピーキングに結びついていくかを、わずか週一回の授業をきっかけに気づき、体験し、挑んでいけるような授業は可能であるのか本プログラムでは、その探究がまだ続いている。

図 3 を従来の筆者の循環型ブレンド教育の概念に当てはめると、図 23 のようになる。

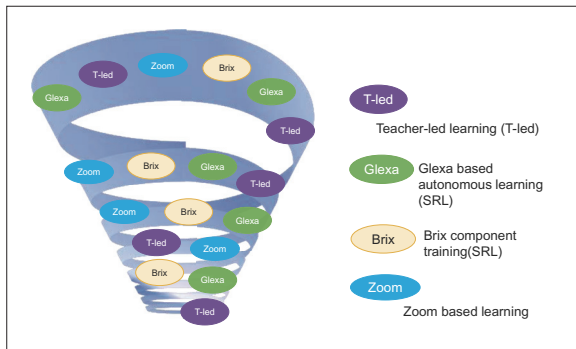


図23 本プログラムにおける遠隔授業スパイラル型学習の進行イメージ

従来の対面授業での概念は、対面授業と自己調整学習（自主学習）がスパイラルに進行し、それが積み上がっていく構図であったのに対し（Oguri et al. 2018）、遠隔授業においては、対面授業に置き換わる部分が教師による手ほどき（T-led: teacher-led instruction）であり、Zoomでの「対面」ライブ型レッスン、「Glexa」「Brix」での学習・トレーニングが結び合わされて、次の学習へと積み上がっていくイメージである。図24のSRLは、自己調整学習（self-regulated learning）である。図24は学習が直線的に流れていくのではなく、図23が表すようなスパイラル型にできれば、その学習力は時間を経て増幅し、一層自律した学習者を形成できるというイメージを表している。

本プログラムでは、図23、図24をイメージしながら授業を進めてきている。2021年度春学期末の2年目のプログラム受講者を対象とした意識調査では、遠隔授業で本プログラムを受講してきた場合でも、教師がこれまで重視してきたペアワーク、グループワークと言った動機づけ機会がなくても、英語に対する学生の意欲、学習姿勢を少し変化させることができるということが分かった。ペアワーク、グループワークを最大の動機づけの機会と考えてきた筆者にとっては、この軌道修

正は苦慮の末の諦めだと言える。しかし、「ペアワークをさせたい」「グループワークをさせたい」とする教師の欲よりも、現状では学生たちが必要な力をつけていける方法を優先した。この選択が果たして正しかったのかどうかは、4学期目以降になってみないとわからない。これまで教師が「これが絶対に良い」と信じてきた授業方法が、その段階でもし「実は成果にはつながっていなかった」と判明すれば、再び授業実践のふりかえりを丁寧にし、今後の授業をデザインしなおしていく必要があるだろう。

コロナ禍は、世界規模で教育と授業に関する固定概念に揺さぶりをかける機会となった。この経験を教師はこれからどう活かしていけるのだろうか。コロナ禍における遠隔授業は、「苦手なことにも挑ませ、学びを続け深めていく」という軌道を教師がどう創っていけばよいのかを考え直す機会を与えてくれた。

LL (Language Laboratory) からCALL (Computer Assisted Language Learning) を経て、コロナ禍となる以前からTELL (Technology Enhanced Language Learning) の時代にすでに入っていた。筆者がTELLの実践を最初に目にしたのは2015年である。⁶⁾ 技術の進化はめざましく、ツールやアプリの一般化や無料での提供など、教師にも語学学習者にも手が届きやすいものとなってきている。しかしその進化は、果たして教師の授業力の進化、向上につながっているのだろうか。

技術が進化し「わざわざ授業に集まらなくても学ぶことができる」あるいは、「授業に集まらない方が学ぶことができる」のであれば、対面授業のあり方、対面授業の質の向上を、教師は一層考えていかななくてはならない。「授業は対面が当たり前」という概念から少し離れてみると、同じ時間に、同じ空間に集まり学ぶ意義の見方が変化するのではないだろうか。授業において①「対面すべきこと」②「対面でなくてもで

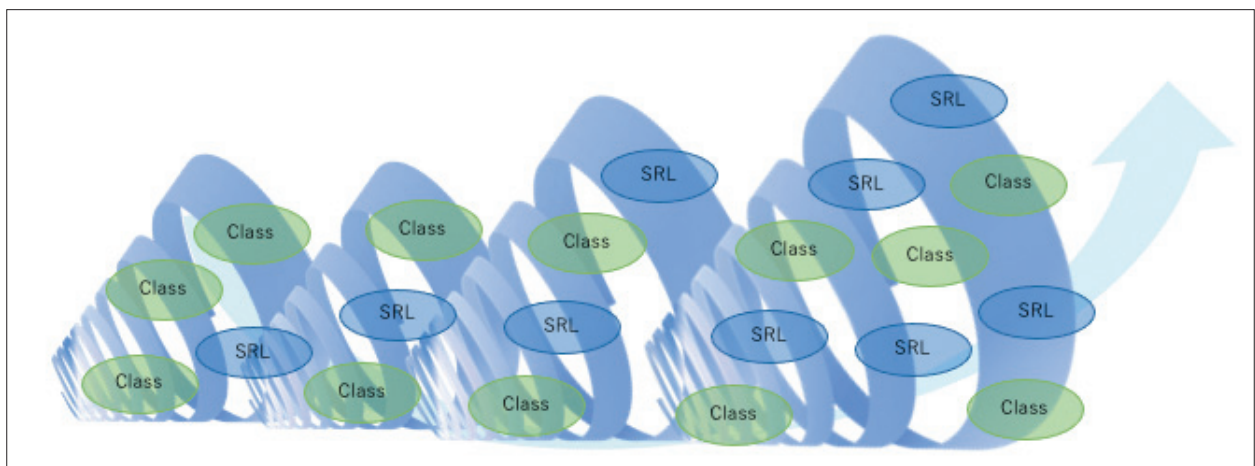


図24 長期的なスパイラル学習の進行イメージ（Oguri, Allen et al. 2018を修正）

きること」③「対面でない方がより良いこと」といった 3 種類のことがあるとすれば、どのような対象者に、どのような段階で何を対面授業で共にするかを的確に選択できる眼と心が、これまで以上に教師に求められてくるのではないだろうか。

評価という面においても再考すべきことは多い。例えばアクティブラーニングが着目されるようになって久しいが、クラスには対面授業で積極性を示すことができる学生と、そうではない静かな学生がいる。果たしてどちらの学習が一過性で、どちらの英語力が定着していくかは、表面化する積極性だけでは測れない。遠隔授業でこそ開花する学生もいれば、周囲に人がいてこそエネルギーを増加できる学生もいる。多様化、多層化する学生に対して、私たち教師が提供する授業は、果たして多角化できるのであろうか。

コロナ禍であろうとなかろうと、どのような状況においても学習を止めないこと、授業がどのような形態であろうとも、どこから授業をしようとも、どこで授業を受けさせようとも、何をどう効果的に教えるかを考えるのが教師の役割ではないだろうか。

対面であれ遠隔であれ「これならできるかもしれない」「もっと学びたい」「さらに続けたい」という持続的な動機づけができるような授業を提供し、その意欲を持続的に支援していくのが教師の役割ではないだろうか。Withコロナの時代であれ、Postコロナの時代であれ、学生と教材が持つ潜在能力を最大限に引き出し、適切な技術で学びの機会を強化 (enhance) し、「集まる価値がある授業」「次に繋がる授業」をデザインしていくことが、これまで以上に教師の役割となっていくのではないだろうか。学びを広げると同時に、教師力を高めていけるよう、TELLがTELT (Technology Enhanced Language Teaching) となり、雇用形態や勤務場所を問わず教師同士が連携していきやすい協働環境づくり、教師同士のシナジーが高まるような同僚性の向上も今後実現していけるよう願ってやまない。

注

- 1) 2020年度春学期の遠隔授業の取り組み方法の詳細については、「中部大学教育研究 No.20」を参照されたい。
- 2) プロソディ (韻律) とは、発音の仕方そのものとアクセントの置き方を除く、全ての音声的特徴のことである。
- 3) 本プログラムで使用しているWeb学習プラットフォーム「Glexa」では、授業へのアクセス、課題の開始・中断・提出、提出物の提出状況など全てを「マイページ」という機能で教師も学生本人も確認することができる。

4) Lecture Notesについて詳しくは、「中部大学教育研究 No.20」を参照されたい。

5) Self-Reflection Formについて詳しくは、「中部大学教育研究 No.20」を参照されたい。

6) FLEAT (Foreign Language Education & Technology) VI Conference (Harvard, US, August, 2015)において、TELL構想のもと複数のアイビーリーグ大学間での遠隔協同語学授業の実践報告がコロンビア大学からあった。

参考文献

- 小栗成子, D.P.Allen (2019)「外国語としての英語力定着に向けた教材の最適化とインストラクショナルデザイン」中部大学教育研究 No.19, 9-23 中部大学
- 小栗成子, D.P.Allen, 杉山優太 (2020)「ブレンドから遠隔への最適化ーコミュニケーション力育成をめざした一年生英語授業デザインの一例」中部大学教育研究 No.20, 53-67 中部大学
- Dörnyei Z. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei Z. (2014). *Motivating Learners, Motivating Teachers -Building vision in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oguri S., Allen D. P., Kato T. (2016). Practice in Practice, Not in Theory: How blended learning supports intake in EFL classes. Paper presented at The Seventh CLS International Conference CLaSIC 2016, Singapore.
- Oguri S., Allen D. P., Kato T. (2017). Teacher Tailors: Enhancing Language Learner Motivation through Material Adaptation. Paper presented at Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL) Conference 2017, Seoul, South Korea.
- Oguri S., Allen D. P., Kato T. (2018). Motivation and Intake: Creating English Learners through a Cyclical Blended-learning Model. Paper presented at The Eighth CLS International Conference CLaSIC 2018, Singapore.
- Oguri S. (2019). AI or Us: Who Runs Our Language Classrooms? Keynote Speech, 2019 International Conference on English Language Teaching. Wenzao University, Kaohsiung, Taiwan.
- Oguri S., Allen D. P. (2021) Together while

- Apart: Inspiring Language Learners through Online Dialogues. Paper presented at The 25th Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL) International Online Conference 2021, Korea University, Seoul, Korea.
- Schunk D. H., Zimmerman B. J. (Eds). (1998). Self-Regulated Learning - From Teaching to Self-Reflective Practice. New York: The Guilford Press.
- Schunk D. H., Zimmerman B. J. (Eds). (2012). Motivation and Self-Regulated Learning - Theory, Research, and Applications. New York: Routledge.
- Walker A., White G. (2013). Technology Enhanced Language Learning: connecting theory and practice. Oxford University Press.

Challenges in the 2nd Year of Distance Learning During COVID-19 : A Class Design for Improving both Skills and Motivation in English Learners

Seiko Oguri^{*1} and ALLEN David P.^{*2}

*1 Professor, Language Program, Global Education Center, Chubu University

*2 Senior Assistant Professor, Language Program, Global Education Center, Chubu University

Abstract

In required English course of the Department of Robotic Science and Technology (ER), a focus has been put on how to make the limited one class period per week a learning opportunity, and have implemented a blended learning curriculum aimed at improving students' motivation to learn English. From its establishment in 2014 until the 2019 academic year, the program blended face-to-face classes with online language learning in order to establish basic English skills. However, in the spring semester of the 2020 academic year, the program had to suddenly shift to developing English skills through distance learning only due to the COVID-19 pandemic. The first experience with distance learning during the COVID-19 pandemic was reported in Chubu University Educational Research No. 20. This paper focuses on changes made following the fall semester of 2020 to improve the distance learning experience in the two-year Robotics English curriculum for the spring semester of 2021, and how these changes impacted the students' motivation and interest in learning English by the third semester.

Key words

Distance learning, EFL (English as a foreign language) pedagogy, intake, material adaptation, roles of teachers